

ジュエリーデザイナー

関戸 智美

Vol. 17

2019年6月発行

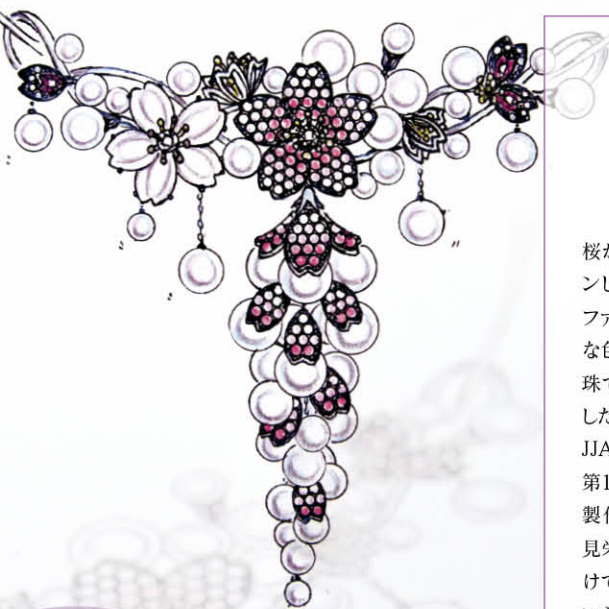
Introduction of works

【春の慶び】

関戸 智美

桜が満開に花開き、やがて散りゆく様をデザインしたペンダントとリングのセット。カラーサファイアのグラデーションで花びらのやわらかな色合いを、薄紅色の光沢が美しいアコヤ真珠で桜の揺れる様と風に舞い散る様子を表現した。

JJAジュエリーデザインアワード2018において第1部門プロフェッショナル部門優秀賞受賞。製作にあたって、アワード出品作品とはいえ、見栄えだけではなく自社の製品として『身につけて美しい』ジュエリーとなることを意識したという。どの方向から見ても真珠が美しく映えるよう、何度も職人と話し合い、微調整をした。日本の情緒を洗練された作品へと昇華しつつ、真珠を専門に扱う会社ならではの強みも最大限に活かしている。



春の慶び

は る の よ ろ こ び

【サイズ】 ペンダントトップ
縦75mm × 横95mm

【素材】 K18WG・K18・アコヤ真珠
サファイア・ダイヤモンド

JJAジュエリーデザインアワード…

日本のジュエリー業界における最高峰のコンペティション。高い技術力とデザイン力を用いた独創的なジュエリーを、国内外へ向け発信する役割を担っている。



山梨ジュエリーミュージアム

山梨県甲府市丸の内1-6-1 山梨県防災新館1階
<https://www.pref.yamanashi.jp/yjm/>

開館時間：10:00~17:30(最終入館17:00)

休館日：火曜日(祝日の場合はその翌日)、年末年始、その他、臨時に開館・休館することがあります。

入館料：無料

駐車場：92台 山梨県防災新館地下有料駐車場(来館者は1時間無料)

craftsman jewelry

craftsman jewelry file.17
tomomi sekido
2019 June

山梨ジュエリーミュージアム発行

憧れから仕事へ

真珠を専門に扱う宝飾会社のデザイナーである関戸は、幼少期から絵を描いたり工作したりすることが好きだった。小学生の時に人形のファッションデザインコンテストに入賞したことをきっかけに「デザイナー」に憧れるようになる。

デザイナーといえばファッションデザイナーばかりを思い浮かべていた関戸には、「今でも鮮烈に覚えている」記憶がある。中学校で宝飾企業を紹介する冊子を読んでいると、その中にジュエリーデザイナーの写真が掲載されているのを見つけた。その格好良さに惹かれ「自分もこうなりたい」と強く思い、ジュエリーデザイナーになることを意識したという。高校卒業後、駿台理工専門学校情報デザイン学科ジュエリーコース（2002年廃校）で2年間学んだ後、株式会社中込宝飾で念願のジュエリーデザイナーとして働き始めた。

「身につけてこそ輝く」ジュエリー

社内での仕事は多岐にわたる。入社当時はデザイン画を描くだけで精一杯だったが、現在ではデザインすることはもちろん、企画提案から貴金属の原型のチェック、最終の仕上げまでトータルに関わることも多い。ジュエリーの製作技術やその工程がわかっていないと的確な指示が出せないため、すべてに関与することはとても大変なことではあるが、それ故自分の関わったジュエリーが仕上がったときの喜びとやりがいは何物にも代えがたい。

関戸は、『人を美しく輝かせるもの』がジュエリーであり、ジュエリーは身につけてこそ輝くものという信念を強く持っている。「この会社だからこそ出来る」クオリティの高さを最大限実現するため、日常の様々な場面でもデザインにつながるものを見つけ出すように意識している。ファッション誌に掲載された服の襟、モデルの立ち姿。あらゆるところにジュエリーデザインにつながる要素が隠れていると関戸は考えている。



関戸 智美(せきどもみ)

ジュエリーデザイナー

JJAジュエリーデザインアワード2018
第1部門プロフェッショナル部門優秀賞受賞

株式会社 中込宝飾
甲府市青沼3丁目3-5
Tel:055-232-5411

「身につけてこそ輝く」ジュエリーを
デザインするために感性を磨き続ける。

craftsman jewelry

Vol. 17

デザイナーとしての大きな転機

デザイナーとして転機を迎えたのは、2008年から山梨県の産地ブランドとして始まったKoo-fuプロジェクト。関戸は1年目から参加し、08年09年にはディレクターとして招請されていたプロダクトデザイナーの深澤直人氏から直接指導を受けた。

「デザインのト真ん中を突きなさい」という深澤氏のアドバイスは、今でも強く覚えているという。不必要なものはそぎ落とし、人が潜在的に欲しているデザインを描きだすということだ。そのアドバイスはジュエリーデザインだけにとどまらず、製品のディスプレイやプレゼンにまで及び、関戸のデザインに対する考え方やものづくりへの姿勢に強く影響を与えている。

Koo-fuプロジェクトへの参加は、デザイナーとして10年が過ぎ安定し始めた頃に、さらに成長するきっかけを与えてくれ、それにより大きな武器をいくつも得ることができたという。それまで交流の無かった他社のデザイナーや、自分の世界観を好きになってくれる人、親身にアドバイスをくれる人などとの出会いの機会ともなり、これもまた大きな財産だと関戸は微笑む。

より良いデザインのために

「作家ではなく企業デザイナーでありたい」と考える関戸は、クライアントの意向に柔軟に対応できるよう、デザインに対して我を通しすぎないフラットさを心掛けている。ゴージャスなハイジュエリーに価格を抑えたライトジュエリー、モード色の強い商品など、多様な商品に対応できる幅広さはデザイナーとしての関戸の強みであり、それは会社の強みにもつながっている。

常に目を引くような新作を生み出し続けなければならないプレッシャーをバネに、自分の中のアイデアの引き出しを増やし、技量を成熟させ、さらに新しいものを表現する感性を身につけていきたいと、関戸は言う。

